

第 55 回 ESRI 経済政策フォーラム
エイジレス社会を目指した AI/ロボットの導入・活用について考える

1. 開催概要

- (1) 日時：平成 30 年 12 月 4 日
- (2) 場所：東海大学校友会館（千代田区霞が関 3-2-5 霞が関ビル 35 階）
- (3) 一般参加者数：75 名程度
- (4) プログラム：

○基調報告

久米 功一 東洋大学経済学部総合政策学科准教授、経済社会総合研究所客員主任研究官

○事例紹介

石山 洗 (株)エクサウィザーズ代表取締役社長

檜山 敦 東京大学先端科学技術研究センター講師

○パネルディスカッション

・コーディネーター：清家 篤 経済社会総合研究所名誉所長

・パネリスト【50 音順】

石山 洗 (株)エクサウィザーズ代表取締役社長

久米 功一 東洋大学経済学部総合政策学科准教授、経済社会総合研究所客員主任研究官

駒村 康平 慶應義塾大学経済学部教授

檜山 敦 東京大学先端科学技術研究センター講師

藤原 佳典 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム研究部長

山本 勲 慶應義塾大学商学部教授

2. 議事概要

- (1) 冒頭、経済社会総合研究所の西崎所長の挨拶の中で、我が国の人口が全体として減少するなかで、高齢者の特性を活かしつつ、労働の質の向上を通じて生産性を高めていくことが重要であり、AI やロボットといった新しいテクノロジーの普及については、高齢者の特性を踏まえたテクノロジーの開発、導入という点からも考えていく必要があるとの認識が示された。エイジレス社会の実現にふさわしい AI やロボットの導入や活用の効果と課題に関し、①テクノロジーを普及させる上で、企業の組織の在り方や制度面での課題は何か、②高齢者自身の ICT リテラシーを含め、現場の職員自身の能力をどう高めていけばよいか、③高齢者の視点をテクノロジー開発に組み込んでもらうためのインセンティブは十分か、等の問題提起がなされた。
- (2) 次に、久米 東洋大学経済学部総合政策学科准教授から「AI/ロボットの導入・活用による労働市場におけるエイジレス化について」と題して基調報告が行われた。基調報告では、高齢者について、体力や記憶力等の認知能力の低下は避けられないが、過去に蓄積した経験等を活かす

能力や忍耐力・協調性等は、加齢とともに高まることが示され、高齢者のこうした特性を活かした就労が期待されるとされた。また、年齢の区切りにとられない人材マネジメント、テクノロジーを活用した能力開発等が求められるとの指摘があった。高齢者の就労に向けては、低下する能力の補強、世代を超えた学び合い、就労による社会参加への評価等について AI/ロボットの活用の可能性があることが指摘された。



久米 東洋大学経済学部総合政策学科准教授

- (3) 次に、事例紹介として、石山 洸 (株)エクサウィザーズ代表取締役社長から、「介護・医療現場への AI/ロボットの導入の事例」と題した報告がされた。介護者、被介護者双方にとってのより良い介護を目指し、実際の介護活動の様態を AI で解析し、被介護者との効果的なコミュニケーションを始めとした熟練者のスキルを共有することを通じて、初心者の介護スキルの向上に AI を活用している事例等が紹介された。



石山 (株)エクサウィザーズ代表取締役社長

また、檜山講師からは、「『高齢者クラウド』による高齢期の就労支援」と題し、タスクを分解しデジタル化することを通じて、シニア層が活躍しやすい環境を作ることを目的とした「高齢者クラウド」における 2 つの取組が紹介された。第 1 は、求人情報における業務内容に関して AI を活用して詳細に分析することにより、当該業務に関する経験が豊富な高齢者を効果的にマッチングさせる取組である。第 2 は、地域活動に興味のある高齢者が、本人の参加希望のスケジュールや希望する活動を細かくシステム上に入力することにより、希望にあった地域活動のマッチングを行う取組である。AI は人と仕事、社会を結び付けるものであるとの考えが示された。



檜山 東京大学先端科学技術研究センター講師

(4) 基調報告、事例紹介を受け、清家 経済社会総合研究所名誉所長のコーディネートのもと実施されたパネルディスカッションの概要は以下のとおり。



清家 経済社会総合研究所名誉所長

まず、駒村教授からは「認知機能の変化と経済行動」と題して、情報を処理し判断する能力は年齢とともに低下するが、他人の考えていることを推測する能力等は年齢とともに向上すること、前者の能力をAIで補完し、後者の能力をAIと協働して伸ばす余地があること、等が指摘された。また、他人に寄り沿う仕事にAIが活かされる可能性があるとの指摘があった。



駒村 慶應義塾大学経済学部教授

藤原部長からは、「地域包括ケア時代における高齢者就業とは」と題して、介護予防の観点からは、高齢者それぞれが社会的役割を果たせるようにしていくことが重要との指摘があり、また、

就労することにより高齢者の生活機能が維持されるとの研究結果が示された。さらに、高齢者の就業状況をみると警備、調理、清掃が就職しやすい職種であるが、介護や家事領域での活躍が今後期待されるとの指摘があった。今後の高齢者就業支援においては、仕事の切り分け（ワークシェア、分業化）にAI・ITを活用することへの期待が示された。



藤原 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム研究部長

山本教授からは、「AI などの技術と働き方・ウェルビーイング」と題して、ICT 等の技術が雇用に及ぼす影響をタスク別にみた先行研究の結果が紹介され、新たな情報技術の代替・補完は、労働者単位ではなくタスク単位で生じること、高齢者が得意とするタスク（判断等）には、代替可能性が低いものも存在し、また高齢者が不得意なタスク（身体／記憶力の利用等）は、新しい技術によるサポートが期待される等の指摘があった。



山本 慶應義塾大学商学部教授

パネリスト間の意見交換では、高齢者がAIとどう協働するかとの駒村教授からの質問に対し、石山社長からは、社内では、AIエンジニアは若い社員が中心であるが、シニアの社員はこれまでの経験を活かして調整を要する業務を行う等分業しているとの事例の紹介があった。檜山講師からは、マッチングの取組を例に、AIを活用した解析により高齢者の能力を的確に把握できる可能性と、タスク分解により高齢者の就業が促進されること等が指摘された。

また、新しい技術の活用促進に向け必要な取組は何かとの清家名誉所長からの論点提起に対し、久米准教授からは、年齢で一律に線を引かないこと、キャリアを自律的に組み立てていくために能力開発を行っていくことが重要との指摘があった。山本教授からは、技術革新が生産性向上、

成長につながるためには、補完的なイノベーション、すなわち組織改革や人材投資、働き方の改革等が必要であるとの指摘があった。駒村教授からは、人に寄り沿う仕事の評価を高めることが必要との認識が示され、藤原部長からは、中小企業での取組も必要であるとの指摘があった。

最後に、清家名誉所長から、AI やロボットを活用しながら、パネルディスカッションで指摘のあった、高齢者の共感力、気配り、目配りといった他人に対する細かい配慮を行う能力を生かす分野の可能性が指摘された。また、新しい技術が社会に浸透していく際には、3つの視点（倫理的な視点、法律的な視点、社会的な視点）からみた課題をどう克服するかが重要としばしば言われており、そのためにも学際的な研究がより重要になっていくであろう、との発言があり、これをもってパネルディスカッションが終了した。

以上